

第九篇 行軍

一

孫子は言う。我が軍を良い地形に置いて、敵情を偵察することについて述べよう。山地を越えるには、飲水と飼料の草がある谷の近くを行き、敵方への視界が良好な高地に兵を置き、敵が我よりも高い場所に陣取っていれば、攻め上ってはならない。これが山地における軍の行動である。川を渡ったならば必ず岸から遠ざかり、背水の陣を避けよ。敵が川を渡って来るならば、敵を川の中で迎え撃つのではなく、その半分を渡らせてから撃つのが有利である。敵と戦おうとするのであれば、川岸でこちらの軍勢を敵に見せてはならない。陣を取るにしても、川岸から少し離れた見晴らしの良い高地を占領し、川の下流から上流にいる敵を迎え撃ってはならない。これが河川における軍の行動である。

沼沢地を通過するときには速やかに立ち去り、留まってはならない。やむを得ず沼沢地で敵と戦うことになれば、必ず飲水と飼料の草がある場所を見つけて、森林を背後にして陣を立てよ。これが沼沢地における軍の行動である。平地ではかけ引きが自由で往来に支障のない場所に軍を配置せよ。高地を背後と右手にし、戦うのに不利な低い地形

を前にして、戦うのに有利な地形を後にせよ。これが平地における軍の行動である。

黄帝が四帝よりも勝っていたのは、これら四つの地形で「地の利」を得る方法を知っていたからである。

二

軍を配置するには、見晴らしの良い高地が好ましく、敵から見下ろされる低地には置かない。四方によく通じて地障の無い広原や平地を選んで、山林・険阻の多い場所を避ける。水や草が豊富で質も良い肥沃な土地を占領すれば、軍にあらゆる疾病が起こることもない。これが必勝の道である。丘陵や堤防では必ず草木などで視界が妨げられない所まで兵を出し、その丘陵や堤防が背後と右手になるようにする。このようにして地の利を得るのが戦いを有利にし、地形が軍を用いる上での助けとなるのである。

上流に雨が降って川の水が泡立ち、色が違っているならば、川下に雨が降らなくてもやがて水かさが増すので、渡るのは水かさが減って流れが安定するのを待ってからにせよ。

地形には、谷が深く水をたたえ、超える手立てが無い「絶澗」、ぜつかん周辺を流れる水が窪地に集まり、自然に池を生じている「天井」、てんせい山や崖に囲まれた狭い隘路で、入ると出られない「天牢」、てんろう草木が四方に

密集して、足元に水が溜まっている「天羅」、てんら 陥没した地に生じた泥沼で、足を取られて動けない「天陷」、てんかん 自然の高低が多く、道が狭く、田んぼや堀などによって地形が連続していない「天隙」、てんげき がある。これらを地形の「六害」といい、必ず速やかに立ち去って、近づいてはならない。我はこれら六害から遠ざかり、敵をそこに近づけさせ、我はそれらと向き合い、敵はそれらを背後にするように仕向けよ。

軍の前進経路のわきに、険しい地形、低く水の溜まった所、森林、葦の原、民屋や寺社など草木が繁茂した所といった人が隠れて潜むことのできる地形があれば、必ず慎重にくりかえし搜索せよ。このような所には敵の伏兵や斥候がいるからである。

三

(一) 陣が近いにもかかわらず、戦いを挑まずに我が兵が来るのをじつと待っているのは、その地形の険しさを待みにしているのである。

(二) 遠く離れているにもかかわらず、兵を出して戦いを仕かけてくるのは、待ち伏せして我を引出そうとしているのである。(三) 陣所などで兵士たちが安んじているのは、地形や援軍などで利があるからである。(四) 多くの樹木が揺れ動いているのは、大軍が攻めて来たのである。(五) 多くの草を結んでたくさん覆い隠しているのは、伏兵をこちらに疑わせるためである。(六) 群れをなしている鳥が高く飛び、列を

乱すのは、その下に伏兵がいるのである。(七) 獣が山林から走り出るのは、その中に大軍が隠れているのである。(八) 砂塵が高く上がって先がとがっているのは、戦車が来ているのである。(九) 砂塵が低く広がっているのは、歩兵が来ているのである。(一〇) 砂塵があちこちに断続して上がるのは、薪を取っているのである。(一一) 少しの砂塵が往来しているように上がるのは、軍が野営しているのである。

(一二) 軍使の言い方がへりくだっていながら、備えを増強しているのは、我を不意急襲する準備である。(一三) 軍使の言い方が強硬で、兵を進めてせり合いを仕かけてくるのは、密かに退却するためである。

(一四) 先ず戦車を並べて警戒し、部隊がそのわきにいるのは、陣を敷いているのである。(一五) 和睦を乞うような状況でもないのに和睦を求めてくるのは、何らかの陰謀である。(一六) いそがしく走りまわって兵士を整列させているのは、援軍や寝返りなどを期待しているのである。(一七) 中途半端に進んだり退いたりするのは、こちらに誘いをかけているのである。(一八) 兵士らが槍や戟げきを杖にして立っているのは、飢えて衰弱しているのである。(一九) 水汲み兵が水源地で先ずその水を飲むのは、軍の飲水が不足しているのである。(二〇) 利益を眼前にしながらい進撃して来ないのは、疲れているのである。(二一) 鳥が集まっているのは、敵が退去してそこに人がいないのである。(二二)

陣内で夜に呼び交わす声がするのは、恐れて不安なためである。

(二三)敵軍が乱れて騒がしいのは、将軍に威厳がないのである。(二四)旗が動揺しているのは、兵士の心や隊伍が乱れているのである。

(二五)督戦する官吏がどなりちらしているのは、敵兵がだらけているのである。(二六)馬を殺してその肉を食べているのは、軍に糧食が尽きているのである。(二七)食器や炊具を外に棄て、その陣屋に帰ろうともしないのは、行詰って死を覚悟しているのである。(二八)大将が同じことをねんごろに繰返し、人々の群れに寄合つてささやいているのは、兵士たちの心が大将から離れているのである。(二九)しきりに賞を与えているのは、人心の離散や士気の低下に苦しんでいるのである。(三〇)しきりに罰しているのは、兵士が疲れはてて、罰を恐れず命令に従わないのである。(三一)はじめは兵士を粗暴に扱いながら、後には兵士たちの離反を恐れるというのは、統率が全くわかっていない将軍である(はじめは自分の暴勇を恃んで敵を侮り、後に敵が大勢であると聞いて恐れるのは、兵法が全くわかっていない将軍である、という解釈もある)(三二)使者が来て過ちを謝し、罪を免れることを求めるのは、その間に兵士を休ませたいのである。(三三)敵軍が怒つて向かって来ながら、対陣したままいつまでも合戦せず、また引き退きもしないのは、援軍や寝返りを待つなど、何らかの理由があるので、

必ず慎重に様子を観察せよ。

四

兵の数は多ければ多いほどよいというものではない。また、単独で猪突猛進するようなこともあってはならない。軍勢が心を一致させて皆が一樣に力を出し、敵の形勢を詳しく知り、優れた将軍を選んでこれを用いるだけでよい。そもそも敵に勝てる方策も考えずに敵を侮っている者は、必ずや敵の捕虜にされるのである。

兵士たちがまだ将軍に親しんでいないのに懲罰を行えば彼らは心服せず、心服しなければ上下の心が不和となつて戦場で用いるのが難しい。しかし、兵士たちが親しんでいるのに懲罰を行わなければ、彼らは温情に狎なれて奢るようになり、戦場で用をなさない。だから兵士を教練する命令・号令は温和にし、それが行われなければ厳しくこれを罰することで、隊伍をそろえ整える。これが必勝の道である。

命令や法令が平素からよく実行され、戦場でもその教えどおりに命令するのであれば、兵士たちはよく服従するが、それらが平素から守られていないのに、にわか**に**兵士たちに命令し、教えるのでは兵士たちは服従しない。命令や法令が平素から実行されているのは、将軍の心が兵衆と相和し、通じ合っているということである。